



Title	”わたしたちの住い”：健康を守るために
Author(s)	北村，貞好；山本，登；青樹，英次 他
Citation	大阪公衆衛生．1972，28，p. 15-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84298
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《健康を守るために》

司会 それではただいまから、「わたしたちの住まい」というテーマについて、「健康を守るために」ということを中心として、皆さんとともに研究を始めたいと思います。

わが国には昔から「衣食たりて礼節を知る」ということばがありますが、その中に「住」は抜けておりません。しかし、現在の私達の日常生活において、「住」の問題は非常に大きなウエイトを占めております。

そこできょうは住居あるいは住というものについて、健康を守るうえの家の問題について、まず先生方に発言していただき、時間があれば会場の方からも発言願ったと考えております。

それでは最初に府営住宅に住んでおられ、前自治会長の北村さんからお願いします。

住宅建設は入居者の立場に立って

北村 私は昨年5月に吹田市にある14階建ての高層府営住宅に入居した者です。19歳で世帯を持ち、文化住宅、アパートを転々として、やっと永住できる、永住するのだと思って入居したわけです。しかし、実際にそこで住んでみますと、あるいはぜいたくなことかもしれませんが、不満な面が多くあります。

その一つは、現在の規格化されたコンクリートの建

物の中の生活には、住民間の会話がないう点です。例えば年寄の方は隣の家遊びに行くとかの姿は見受けられず、子守をするだけといった形になっている。



先日も、老人クラブを結成し会合をもったのですが、20名しか集まらなかった。残り40名を戸別訪問しますと、田舎に帰っているとか親戚に行っている。よくたずねてみると前に住んでいたところがなつかしいと言って帰っているわけです。隣り近所に訪ねて行けない、いわば隔離されている状態その点情緒がなく、あるいは人間的な付合いをわざわざ遮断されている状態、若い人はこれで2人きりになれる、あるいは鉄の扉で安心だと考えているようですが、いずれ気持ちが変わってくると思います。

エレベーターで昇り降りする住宅構造、のぞき窓、鎖で外部としゃ断された合理的あるいは警戒的な住宅構造では、訪問もしにくいのです。昔の隣組、隣人愛とかいうものはすでになくなっており、私も入居して10カ月近くになりますが、まだ全然顔も知らない人が多い状態です。まして現在の建設方針、2DKあるいは3DKの規格住宅では、核家族化を推進し、一時的

に定着はするけれどもいずれまた引っ越しする考えの人が多く、それがまた住民の生活に反映して、住民意識を低下させているのです。私達の住宅720戸のうち半数が新婚で、このところおめでた続きですが、大体子供が2人になると引っ越しする考えだというアンケート結果も出ております。

そして他の面としては、現在の住宅は一見合理的に建設されているようにみえるけれども、実際には施設面でも十分には配慮されていない点です。まずゴミの問題では、何でもダストシュートで落す関係から、その下の近辺の



人は、特に夏は耐えられない程の臭気に悩まされるのです。改造の余地は見受けられないけれども、その衛生的な面を何とかしていただきたい。

次に火災についてですが、私の団地ではガスの配管は台所1か所だけであり暖房には灯油を利用している関係上火事の原因は冬の間は石油ストーブが多い。防火対策もその関係にしばっておりますが、しかし火事になった場合は、火元の家のみを犠牲にし、密閉して類焼を防ぐよう訓練しております。といいますのは、市の消火態勢は、先日、訓練しましたが、14階建ての建物があるのに梯子車は11階どまり、車の立入りを防ぐ鎖を切るのに約15分もかかる現実、これでは困るのです。駐車場の問題についても然りで、他の住民との間でトラブルが絶えません。

子供の遊び場についても、子供1人当たり面積は府下では大体1.5㎡はあるが、私の団地でははるかに少なく小学校の校庭でも1㎡しかない。新校舎を建設するにしても、青写真ができてから完成までに3年もかかっております。

あるいはまた、幼稚園や保育所探しをしなければならない。これらについて、吹田市に限らず、受け入れる側の市は、一体その対策をとっていただいているのかという点であります。こういう実態は、他の団地でもあると思います。

以上いろいろ申しましたが、団地生活を経験してみても、あるいはぜいたくかもしれませんが、要するに現在の住宅は、住むだけならまず可能だが、生活という面で考えると不可能に近いと申しあげたい。前に申した以外にも、湿気の問題、棟と棟との間の利用法その他いろいろありますけれども、建設に際しては、住め

るというだけでなく生活する者の身になって考えていただきたいと思います。

司会 それでは次に住宅公団大阪支所長の青樹さんに建てる側からお願いします。

人間を育てる住宅の建設を

青樹 まず、私たちが最も困っているのは、住宅とは何だということです。私、戦後の占領下に住宅を建設したことがあります。そのとき検査にみえたGHQの女性の方から、住宅とは人を育てるところだ、これが最も大事な要素だということをうかがったのですが、いまは量的生産が主題となって居住性は低くみられておりますが、住宅の大きなねらいはやはり人を育てることでしょう。

では良い人を育てるとはどういうことかということになります。41年10月に、中央教育審議会が「期待される人間像」というのを出しており、その中の「個人として」、「家庭人として」、「社会人として」、「国民として」と、4つの大項目に分けて述べております。それでは、これらの項目を家庭ではどうして教えるかであります。「個人として」の中に「畏敬の念を持つこと」という項目がありますが、この場合、心身ともに健康な父母の存在が当然その前提になります。それから「家庭人として」の中に「家庭を愛の場とすること」という項目があります。母親の愛、父親の愛、兄弟愛、これは家庭の中で育っていく。ところが1人2人の子供では兄弟愛は育たない。3人以上で初めて兄弟愛の生まれてき、それが社会愛につながっていくわけで、私たちは、標準家庭としては子供3人以上を考えています。そして同じく「家庭人として」の中に、



〈演者〉

府営岸部第1住宅前自治会長・民生委員

北村 貞 好

大阪市立大学文学部教授

山 本 登

日本住宅公団大阪支所長

青 樹 英 次

大阪府立公衆衛生学院長

八 木 明

〈司会〉

大阪府立公衆衛生研究所長

古 野 秀 雄

「開かれた家庭とすること」というのがありますが、外との交渉ができないというのは良い住宅ではないし、良い家庭でもない。ではどうしたら良いかという問題があります。

それから、「期待される人間像」ができたときに、陛下が住宅について話を聞きたいとおっしゃられ、林前住宅公団総裁がお話したのでありますが、そのときご下問が出ております。その1は、日本の住宅は欧米と比較してどうかということでしたが、この問題は欧米と同じ人間形成をするのか、日本人独自の形成をするのか等の問題を含んでおり、これはやはり皆さんとともに考えなければならない。その2は、通常1戸というのは何部屋かという点ですが、子供の数、老人と同居するか否かという家族構成の問題を含んでおり、これもやはり皆さんとともに考えなければならない問題です。その3は、住宅に必要な土地は1戸当りどれくらいかということです。

日本は国土が狭いうえに平地が少ない。生活物資も乏しい。資源もない。いきおい外に道を求めざるを得ない。しかし排斥されるということで、戦争となった。と思いますが、同じく民族のストレスというものと考えると戦争につながる危険を蓄積になります。幸いにして現在は建築材料が豊富ですから、高層住宅を建てられ、ゆったりした生活環境をつくることができます。それとアパートのあじけなさは植物とのつながりががない点にも原因がありますが、現在、少々水をやらなくとも枯れない方法を実験中であります。

それから、人を育てるためには両親の健在ということが大事ですが、まず母親の健在ということについて終戦直後に調査したデータがありますので説明します。昭和24年に大阪市が建築材料を実費で市民に提供して、個人で建築していただいたことがあります。当時の公営住宅は約35㎡だったのですが、この試験住宅は大体40㎡で、中二階をとるなどぜいたくな家ができたと紹介されたのですが、その中で主婦の作業の実態を50世帯、1週間にわたって調査したものです。それによりますと、家事作業の時間は子供がふえるにしたがって分断されています。また、衣食生活作業時間は子供3人までは子供数に比例して増加するが、それ以上は増加しません。1日は24時間ですから、母親は子守しながら、洗濯するとか炊事するといった二重作業をやらざるを得ないのであります。では子供3人のときには満足に作業が遂行されているかというと、時間的に8時間分不足する。子供3人で下が乳飲み子というのは母親が最も忙しいときで、世の中から取り残されて家事だけしている、精神的な自殺をしてしまうとき

です。女中さんを置けないで8時間分をどうして縮めるか。今は電気もガスも使える。しかし8時間分も節約できるかという問題があります。

それから、自分の父母が他人の世話になっていては



子供に畏敬の念を教えられはるはずはないと思います。やはり子供には死ぬまで親の面倒をみる義務があるし、親もまた豊富な人生経験を子供に引き継ぐ義務がある。戦後家族制度は一応こわされ

れ、子供と別居する親はものわりの良い親で、子供は親の享楽の産物として生まれたのだから親の面倒はみなくてもよい。といった風潮が出ておりますけれども、実験にはそれほど家庭はこわれておりません。大阪府の調査によりまして、同居希望29%、どちらともいえない21%、合計すると50%になります。同居したい方がかなりおられるのですが、しかし同居できる部屋がないのでは困るわけですし、私達としても府民の方の切実な希望をうかがって住宅を建てていきたいと考えております。

最後に、北村さんから批判がありました。日本の木造住宅は2千年近い歴史をもっております。ヨーロッパの住宅も何千年の歴史をえています。日本は国土が狭いために高層住宅に住まねばならないということになりますと、人間形成一つを取り上げて10年かかる、健康の問題でも5年かかるとなると、やはり皆さんのお力添えをいただいて、これから国民と一緒に新しい課題に取り組んでいかなければならないと思います。

司会 引き続きまして都市社会学を専攻しておられる山本先生をお願いします。

矛盾の上になりたっている都市生活

山本 日本ではある意味では住宅が住まいの全部だという感覚を持たれています。現に日本の都市社会は住宅が集まってでき上っていると言ってよい。交通機関、商経済活動等は当然背景としてありますが、生活と関連させた場合、大体住宅があって都市があるのだという考え方の中で日本の都市は成長してきたのではないかと考えられます。例えば東住吉区や近郊の開発が進んでいる地域においては、まさに住宅中心の都市ができあがっていると言っても良いかと思います。

では住宅の現状ですが、1戸当りの平均敷地面積は大阪府下全域について120㎡、これは全国最低です。また1戸当りの延べ建坪は大体54㎡となっております。43年の統計ですが、府下で約40万戸の住宅難世帯があ

ります。困っているとかいった心理的要因を入れた住宅困窮世帯は実に44%もあります。かように住宅問題といっても、それ自体にまだまだ大きな問題を持っているわけですが、しかし暮らしというものを考える場合に、住宅だけを考えるだけで良いのかという点が疑問になるわけであります。

先ほど北村さんからお話がありました、住宅の規格化の問題とか湿気の問題、あるいは幼稚園とか駐車場の問題等もあるわけです。幸いにして吹田市の場合は公害の問題はないようでしたが、現在、住民運動が非常に活発になってきております。その内容はいろいろありますが、タイプとしては一つは公害等のいわば私達の生活に対して何らかのマイナス的な影響を及ぼしてくるであろうと推測されるものに対する抵抗運動という形であり、他の形は幼稚園や保育所を建設しろといった要求運動という形であります。後者は生活施設といわれるものに関する問題であります。暮らしというものは、雨露をしのぐ住宅だけでなりたつものではなく、人間を育てていくという面を考えるならば、住宅それ自体とそれを支えているところの環境、さらに、住宅と関連して生きている人間の使う施設。この3つが整ってはじめてなりたつと言ってよいわけです。

ところが日本の都市はその中の一つである住宅のみが中心となって形成されてきたところに現在の大都市生活における混乱があり、それが一方においては住民運動という形になって出てきていると考えて良いのではないかと思います。

特にこの住民運動の問題を考えますと、いままで住まいさえあれば良いのだという形でならされてきたところから、あるいはまた、自分の住宅以外のところはいつでもよいのだと考えない限り日本の都会人は居住できにくかった。いわば住まいだけが自分の城であって、それ以外のものはまさに他人のものであり、当然それはある意味では地方自治体などがやってくれるところであって、自分とは無関係なところなんだという思考形態、意識が定着している。このこともその関連として問題になってくると思います。

いずれにしても住宅中心な都市の日本の都市の特性であります。現在では、たとえば公害について考えてみても、騒音は遠慮なく入り込んでくる。粉じんや特にガスになりますといかに戸締りを厳重にしても忍び込んでくる。こうなるといわば環境的な側面を考えていかなければ、住宅という城の中の生活そのものが維持できない状態になってきている。これが住民運動として展開せざるを得なくなった一つの大きな条件であり、自分の肉体そのものが危機に瀕しては



めて住民運動という形の展開が出てきたと考えてよいかと思います。

ところが、たとえば農村地方とか過去の時代を考えると、ガスや電気はなく薪炭を自給している、あるいは治安面を考えても自衛団のようなものを組織してみずから守らねばならない。そういうことでいわば地域住民は連帯していかない限り生活そのものが困難になるという状況にあったわけです。それに対して、現在の都市においては、最低限必要な施設、公団住宅といったいわば都市施設のものは一方において完備しています。人間を育てるといううえでの諸施設というものには非常に問題が残っていると思いますが、地域生活をする場合の最も基礎的な一般に都市サービスと言われているものが完備してくるに従って住民が共同する必要は減少してくるということは否定できません。

大阪市内である調査をしていたときのことで、旧農村的なその地域に入ってきた新しい住民は、当初だれも町内会に入ろうとはしなかった。ところがたまたま大雨が降って物資配給とか衛生処理とか住民が一つになって行動しなければならなくなってくると来住住民が町内会に入ってきた。そして地域組織らしいものができあがった。という例があります。その意味で都市サービスを一切ストップさせれば住民の団結はできざるを得ない、という逆説が成立するのですが、いまやまさにそういう状況になってきて、住民運動という動きにならざるを得なくなってきた。いわば矛盾の中に現在の大都市というものがある、というふうに考えて良いかと思います。

ところで公衆衛生という立場からいまの状況を考えてみても、都市では多数の住宅なり世帯が相互に関連

して生活しており、地域全体としてまとまって行動しなければならない状況にあるけれども、現実的には都市内部における地域社会の形成はほとんどできない状態にあり、環境衛生というようなものも保健所その他が音頭をとらねばならないわけですが、そのコミュニケーションそれ自体すら困難である。現在はこういう状況の中にあるわけです。現在の大都市生活における矛盾、この点を指摘して、今回はこれで終ります。

司会 次に八木先生に、お医者さんの立場から、ご自由にお話を願います。

もっと医者の助言を取り入れよ

八木 私は非常に初歩的な問題の中に医者としての考え方を加えながら、ふだん考えていることを申しあげたい。

きのうは横井さんデーの観を呈していましたが、あの方は28年もの間、着る物を自分で作り、しかも孤独のほら穴生活の中で通風孔をつくりまた、水浴などをして健康を保持してきたのです。それにはもちろん自然条件も幸いしていたでしょうが、しかし、これから考えましても、人間は生活の知恵を衣食住すべてにわたっていままで積み重ねてきています。

そこで家に対する考え方についてみてみますと、水さえあれば生活できる。家を建てていくというのが日本人の考え方であったと思うわけです。ところが欧州では、³町づくり、ということが基本になっておりまして、町の公共施設が先行しなければそこに人間は住めないという考えであります。明治以来、日本で伝染病がたびたびまん延しましたが、やはり住宅と町づくりとは並行して考えるべきだと思います。

歴史的に日本の家の問題を考えてみますと、東大寺という相当な高さと重量がある立派な木造建築を建て、しかも長い年数もたしている建築技術、また正倉院のように腐敗を防ぐ建築様式等を見ましても、日本には優秀な大工がいたわけです。であるのになぜ堅牢な石の家を作らなかったかということを考えてみますと、石の家は日本の気候風土に合わないとか肌で感じていたのではないだろうか、戦時中に防空ごうの中に大事なものを入れていると腐らしてしまった経験のある方もあると思いますが、体験的に鉄筋建築は住む場所としてふさわしくないと考えて作らなかったのだらうと思うわけです。先ほどから鉄筋建築の問題が出ておりますが、その場合最も考えねばならないのは湿気の問題だと思っています。現在の日本の住宅は非常に

狭いフロアの中でしかも間仕切りをする、中で火をたく、最も問題になるのは畳を持ち込んでいることです。満蒙開拓団が畳を持って行って多数の結核患者を出しておりますが、少なくとも満蒙には満蒙の建築様式、資材があるはずで、日本でも鉄筋建築をするならば、すき間のない鉄筋住宅に畳を持ち込んで良いのか悪いのか、その問題も含めて日本の気候風土に合った様式を、将来の問題としては検討しなくてはならないと思います。

それから先ほど断絶の問題が出ておりましたが、現在の隣近所とまったく隔離した形の生活、これでは住所ではなくて居所にすぎないと思います。住むということは少なくとも隣近所との連係の中で生活することだということになると、精神衛生的な面から考えても、やはりその辺も考えた建築構造にしないといけないかと思っています。バリのアパートへ行きましたが、いまの日本のような形にはなっていないような気がします。その点日本の鉄筋建築というものをもう少し目的にあったものに考えられないうらうかと思えます。

次に、家の構造を考えてみますと、典型的な日本の農家では、南側の日当りの良いところには来客用の座敷から仏間があり、北側が寝室になっています。つまりお客様向きにできていて、家族が毎日使う寝室は非常に虐待されている。外国の建築は、自分たちが住む場所は最も健康的でなくてはならない。いつ来るかわからないお客にはそのときだけ適当に手当てすれば良いという合理的な考え方で、リビングルームは日当りの良いところにあります。同時に日本では、大い家の周囲に塀をめぐらして灯笼等を入れたりしていますが、ごく限られた人だけが見て楽しむといった非常に閉鎖的な形の家をつくるのが多く、それが伝統であった



わけです。外国、特にオランダなどでは生垣で見とわしげき、しかも門は開放していて通行人も中に入っているに楽しんでいます。都会生活になりますと、塀は少なくなりましたが、都市化すればするほど人からじゃまされないようにという閉鎖的な「居所」という方向に傾いてきている気がするわけです。

また土地の関係から日本の建築は上に延びる鉄筋建築にならざるを得ないとしますと、先ほどの湿度の問題、また温度の問題をどうするか。セントラルヒーティングにしても日本の服装の習慣を考えなければならぬし、冷房にしても健康に非常に影響を与えますので、その使い方を考えなくてはならないという感じがします。また、音の問題ではダスターシュートの音、廊下の靴音等、どれだけ考えられているでしょうか。あるいは色の問題。日本の家庭では床の花を生けかえたり掛け軸をかえることが家庭に変化をもたす唯一の手段となっております。外国では少なくとも年に一、二回壁紙を張り変えることが主婦の仕事であり、その際に家具の配置を変えて気分転換をはかっています。日本の鉄筋住宅の場合それは可能かどうか、同じ壁の色の中で長く住むことは精神面に影響はないかどうか、これらのことも当然考えて住宅を建設していかなくてはならないのではないかと考えるわけです。



以上いろいろ申しましたが、私は、人間が最も長い時間を過ごし最も健康に重大な影響を及ぼすと思われる住宅について日本人の健康に合う住宅をつくるために、これまで医者がどれだけ助言し、助言が取り入れられているか、非常に疑問に思うわけです。日本の医者は社会復帰方面の努力をする方がほとんどで、病気を予防し健康を増進するという方面に進む医者は非常に少ない気がします。特に毎日住んでいる家の問題については、健康への影響はすぐには出てこないために、医者が払う注意はより少ないだろうという点を考えますと、将来はその辺もう少し考えなくてはならないと思うわけです。ネズミの問題にしてもゴキブリの問題にしてもしかりです。

昭和22年ごろに市営住宅、府営住宅がたくさんできましたが、いまでは完全にスラム化しております。現在2DK、3DKといった狭い住宅をつくっていますが、50年、60年たった場合、またスラム化するのではないかとことを考えますと、将来計画についてはもっと健康というものを考えた住宅を、日本に合った形でつくるべきではないかと思うわけです。

司会 これで第1回の意見発表が終了しました。きょうは健康を中心とした住まいをテーマとしておりますが、住居はやはり暮らしの本拠でありますから、衛生面はもちろんですがそれだけに限られず、いろいろな生活施設の問題、あるいは隣近所のいわゆる人間関係の問題等いろいろな問題を含んでいるわけです。それでは今度は、お聞きになって考えられたこと、あるいは思い出されたこと等もつけ加えていただいて、第2回の発言をお願いします。北村さんどうぞ。

北村 現在の府営住宅には台所の流し台と換気扇はつけられていますが、デイスボーターはついておりません。あれは割箸でも砕けますが、仮りにこれがついていればゴミの問題は多少解決するのではないかと思います。といいますのは、現在はスイカの皮や野菜くず等の残飯をダスターシュートで棄てていますが、粉碎して下水に流せば、特に夏場の臭気は防げると思います。換気扇同様に最初からつける考えは公団としてはありますか。

司会 それでは青樹先生どうぞ。

現在はまだ量の段階である

青樹 いろいろ問題が提議されましたが、きょうは住宅公団の支所長としてではなく建築家という立場で話させていただきます。

まず暖房の問題がありましたが、もともとガスを生だきして排気ガスで部屋を暖めるという方法自体鉄筋の住宅には非常に無理があります。ガスは燃えて水と炭酸ガスになりますから、排気ガスで部屋を暖めると部屋の中は非常に悪い空気条件になり、非常に健康に悪い。場合によっては命を落すこともある。だから窓をあけて換気しなければならないのであります。しかしそれが日本人には無理だとなれば、やはり窓をあけずに換気する方法を考えなければならないと思います。

小さ過ぎる鉄筋住宅ばかりつくっているのではないかということにつきましては、日本はなるほどGNPは第2位になりましたが、社会資本の蓄積は乏しくむしろ後進国なみではないかと思えます。西欧諸国ではいままでも住宅など社会資本の蓄積ができていますので、社会増、自然増に対応するだけの住宅を配慮すればよいが、日本はこれまで生きるための時代が続き、やっとその心配がなくなって、これから身の回りを整えようではないか、という段階だと思います。さらに、現在は都市への社会増が非常に多く、例えば東京では80万世帯が多くは結婚早々の人ですが、木造賃貸アパートに住んでおります。^{※1}世帯1住宅、は終って^{※1}人

1室、だと言われていますが、まだ依然として数の段階であります。

質の問題も同時に考えていかなければいけないわけですが、日本の国力は住宅について質量ともに満足させられる段階にはまだ至っていないと思います。また、住宅を建てる前に下水なんか当然できていなければならないという話もありましたが、ご承知のとおり、公共投資面も日本は非常におくれておりまして、逆の順序にならざるを得ない。これからはおくれを取り戻す努力をしなければならないと思います。

それからデスポーザーについてですが、それで処理できれば衛生的にも非常に良いことだと思います。ただ現在は下水設備が整っておらないので、地方自治体から使わしていただけないわけです。それで住宅公団が下水処理するところで近く試験的に使用してみたいと考えています。また、デスポーザーの性能につきましても、粉碎の仕方が荒いとかの問題もありますが、文化生活をするうえでは考えなければならないことですので、研究を進めたいと思っています。

司会 共同生活をしていくうえには施設面からの制約もありあるいは社会的ルールを守らなければならないということもありますが、その辺、山本先生よろしくお願いします。

新しい住民運動により共同社会を

山本 生活の中の矛盾、これを解決していこうとするところにある意味での人間の努力が発生してくる、むしろ快適でない状態にある人間ほど強靱な生活ができるということも言えないことはないわけですが、では現在の矛盾をさらに激化させたらよいのではないかということにはならないわけですし、何らかの形における人間の一体性といいますか、共同関係におけるよりよき人間関係の形成といったものをつくっていくのとなれば、人間としては意味がないのではないかと思います。

現在の都市計画等においても、そうした新しい形の都市内部における共同生活体といったものをどうしてつくっていくかといった点が一つの基本的な課題になってきておりますし、また、行政自体にしましても課題になっております。たとえば街路その他の美化と関連したゴミについて考えましても、共同住宅化してきますと、自分の家の前、扉の前だけは掃いてきれいにするけれども、建物の周辺など掃く人はいない。排水口にドロがたまっても使えなくなっても放置しているといった全体としての環境悪化が出てくる。行政もそこまでは手が回らないし、住民も困ってしまっていや

うなしに住民の協力が出てきておりますが、そういう面からも地域社会といえますか何らかの形において住民の共同体的性格をつくっていくと、都市はもう動きが取れなくなってきたと言ってしまうわけでは

他方、住民運動においても問題があります。各人の関心は個々ばらばらなんです。だから幼稚園、保育所、ばい煙といった単一目的の運動に対しては地域住民は集合しますが、複合目的の運動になると自分には関係ないとか運動すれば逆に自分の首を絞めることになるといったことで、うまくいかないのです。良い例ではないですが、公害地域に指定されますと、病人は公害病に認定されると医療費は公費負担になるが、地主は地価が下って大損をするということで、利害が対立するわけです。そこに調整の問題が起ってくるわけです。



ではどうするかとなりませんが、結局、日常生活の中で住民の話し合いの場として、コミュニケーションセンター的なものを都市計画の中でつくらなければだめだと思います。ところが現状では場所の問題とかが出てくるわけですが、私は小学校を開放して利用すればできないことはないと思います。そういう角度から都市の全体的な姿を見出していけば、その中で初めてそれぞれの住宅、相互に関係する環境衛生的なことも解決されていくのではないかと期待しているわけです。すでに部分的にはそういった動きがありますが、全体としてのそういう形のをどうやって今後つくっていくかということこそ課題ではないかと思っています。

司会 それでは八木先生、お願いします。

家庭生活にうるおいが必要

八木 私は住宅に住む人間の健康を保つためにはどうすべきだろうかという観点から、したがってつくろはうは日本の気候風土に合う住宅の研究を頼むねばならないし、住む人も暖の取り方にしても、もう少し工夫をすべきではなからうかと提案申し上げたわけですが、同時にヒューマンリレーション面での問題もあるわけです。鉄筋住宅の上の階に住む人の中には、「私のところには蚊も蠅もないから衛生費は出さない」と言う人もいるそうですが、その辺、同じ地域に住んでいるという隣人的なヒューマンリレーションがどこか欠けているのではないかと、入れものによって人間がそうなるのであれば入れものについても研究しなければならぬのではないかと、でなくては日本国民の何か精

神的な良い面といったものがなくなってしまうのではないかと思うわけです。

われわれの家庭生活の中で仏間は精神的な中枢であったのですが、現在では仏間のある家は非常に少ないだろうと思います。最近外国に行ってきた子供が、外国では宗教的な戒律というものが中心になって、精神的な生活というものが家庭生活を支えている。日本には宗教的な雰囲気はないし、精神的な中枢はどこにあるんだという感想をもって帰ってきております。また外国の家庭では子供の躾が非常にきびしいということも言っております。その方法は説得であります。

日本では子供をひっぱたく、あるいは押しつけるということが多くそのために断絶といった現象が起るのではないかととも言われております。日本人には精神的な中枢がない、あるいは日本人の子供には国家的な意識がないという子供の指摘、これを家庭生活の中で生かして身につけさせられるかということになると問題があると思います。その意味では住宅に入っている人もお互いが工夫研究しなければならんと思いますし、肉体的にも精神的にも健康についてもう少し医者が世話をやいた方がよいのではないかと思います。同時に住宅をつくる場合も考えていただきたい。

さらに申しますと、最近レジャーブームで、団地でも自動車を持つ方が多いのですが、やはり集団生活する場合には自分の欲望を抑制する態度もあってよいのではないだろうか、あまりにも個人的権利の主張が過ぎますと、共同体としての生命というものが失われてくるような気がしてならないわけです。そのためには住宅を建設する側と場所を提供する都市等の準備が先決問題であり、同時に入居者がもう少し生活の知恵というものを考えながら日本に合った家というものを工夫していく必要があるのではないかという気がしてならないのであります。

司会 どうもありがとうございます。

これで各講師から2回にわたってご意見をうかがったのでありますが、会場におられる方で何かご意見なりご質問でもけっこうですが、ございましたらどうぞ。

質問 私は現在、西淀川保健所で公害の規制の仕事をしております。先ほどからいろいろとご説明をうかがったのですが、私なりに感じたことを述べさせていただき、あと二、三質問させていただきたいと思います。

われわれ人間は生活しているわけですが、生きているという意味では動物もいる。しかし動物は衣の生活はない。食も自分達の回り

の空間をかけ回って得ているにすぎない。住も外敵から身を守るぐらいである。ところが人間の場合は、住の問題について考えますと、現在では都市そのものがわれわれの生活空間そのものになっており、憩いの場所として公園なり遊び場があり教養娯楽の場として図書館や美術館があるが、それら生活空間の拠点としてわれわれの住居があると思うわけです。現在は公害がマイナス要因としてわれわれの生活環境におおいかぶさってきておりますが、高速道路のすぐそばに公団住宅を建てたりするだけでなく、前もって都市計画を確立して、人間の快適な住環境というものを確保していかなければならないと思います。

若干質問します。まず、人間はものを創りあげていく動物ですが、公団が住宅を建設する場合に、入居者が自由に間取りを構成できるような建て方はできないものでしょうか。それから北村さん、高層アパート独自の問題もあるでしょうが、長屋に住んでおられる方々と同じく、自分達の住まい、生活環境という観点から連帯して問題解決に取り組むことはできないものでしょうか。

司会 では青樹先生からお答え願います。

青樹 お話にもありましたように、住宅問題は都市問題に含めて解決しなければならない問題であります。公害も是認しているのではありませんが大阪の場合は風上が海で工場があるわけです。やはり根本的に都市の形態を整えることをやっていかなければならないわけですが、近代都市は住民が参加してつくらねばならないものであります。その場合は部分的な観点からの主張でなく近隣の都市も含めた大局的観点から問題解決に向わないと、住宅問題も解決しないし、公害問題も解決しないと思います。

それともう一つ、子供の人間形成の場として最も大事なのは遊び場ですが、女の子はほとんど全員草花をつくりたがっておりますので、草花をつくらせ





てやれば立派な母性としての知識を身につけることになるのではないか、バルコニーに花壇をつくれるようにしようではないかということで、バルコニーで植栽が育つかどうかという実験を名古屋でやりました。大阪でも千鳥橋団地で実験する予定です。うまくいけばさらに広場をつくって花壇を置き、井戸端に代る一つの場としたい。そうすれば自然に近隣関係は育ってくるのではないかと考えております。

司会 では北村さん。どうぞ。

北村 入居申込みをされておられる方などからすれば、あるいは私の言ったことはぜいたくかもしれませんが、しかし、たとえば私の団地では先ほどお話にありました植木にしましても、その他犬、ネコ、鳥等一切禁じられております。公園も少ない。隣家に行くのにも階段を上下しなければならぬ。実際住んでみますとその他いろいろ不満があるわけです。ところがこれらの問題を解決しようと思っても、住民は直接自分に関係あることにしか関心を示さない。あるいはつきあいがわずらわしい、といったことで、自治会の会合一つ開きましても非常に集まりが悪いわけです。

しかし先にあげました問題を一つでも解決しようと思えば、やはり全居住者が一丸となって、それに当るといふほうが効果があがるのでありますから、地域の方にはやはり共同意識を持っていただきたいとします。そして暖かい人間関係を築き、住みやすい住宅にしていくよう、全員が心がけていただきたいとします。

司会 山本先生、まだつけ加えていただくことがありましたらどうぞ。

山本 先ほどのお話にもありましたが、従来の住宅政策は府営住宅にしましても、まさに住宅だけを建てていく、いかに安く能率的に建てていくかということが主となって、そのためにコミュニティーを犠牲にし、ある意味では家庭生活そのものを犠牲にしてきたと言ってもよいでしょう。それに対する反省の中から、現

在、住宅公団などでコミュニティーをつくるということ的前提とした住宅計画ができてつつありますが、この考え方を一般の町にまで及ぼしていかなければならない。そういう方向に今後は都市を進めていかなければならないと思います。

プライバシーとの関連にしましても、共同生活というものとプライバシーというものとは必ずしも対立するものではないのであって、両立させていくのであればプライバシーの尊重とか個性の尊重とかいっても、結局は意味のないことになるのではないかと思います。

戦後20数年、しかも実際にはせいぜい10年間で急激にここまできたあたりに、そんな短期間に変えられるはずがないのに変ってしまったというところに、日本の都市なり日本人自体が奇型児となった根本的な原因があるのではないかと、このあたりをみんなでどう考えていくかということではないかと、というふうに思います。



司会 どうもありがとうございます。住宅はだんだん普及してまいりましたが、設置者においても、また中に居住される方々においても、まだまだいろいろと話し合い、あるいは研究

していただくところが非常に多いのではないかと思います。ことを痛感した次第であります。

皆様にもこれからの住宅における広い意味での衛生問題に対して何がしかの示唆を得ていただきましたならば、このディスカッションも一応の目的を達したことになります。まことに不十分ではありますが、また皆さんのご発言をもっといただきたいと思います。が、予定の時間もきましたので、このディスカッションをこれで終らせていただきたいと思います。長時間どうもありがとうございました。